

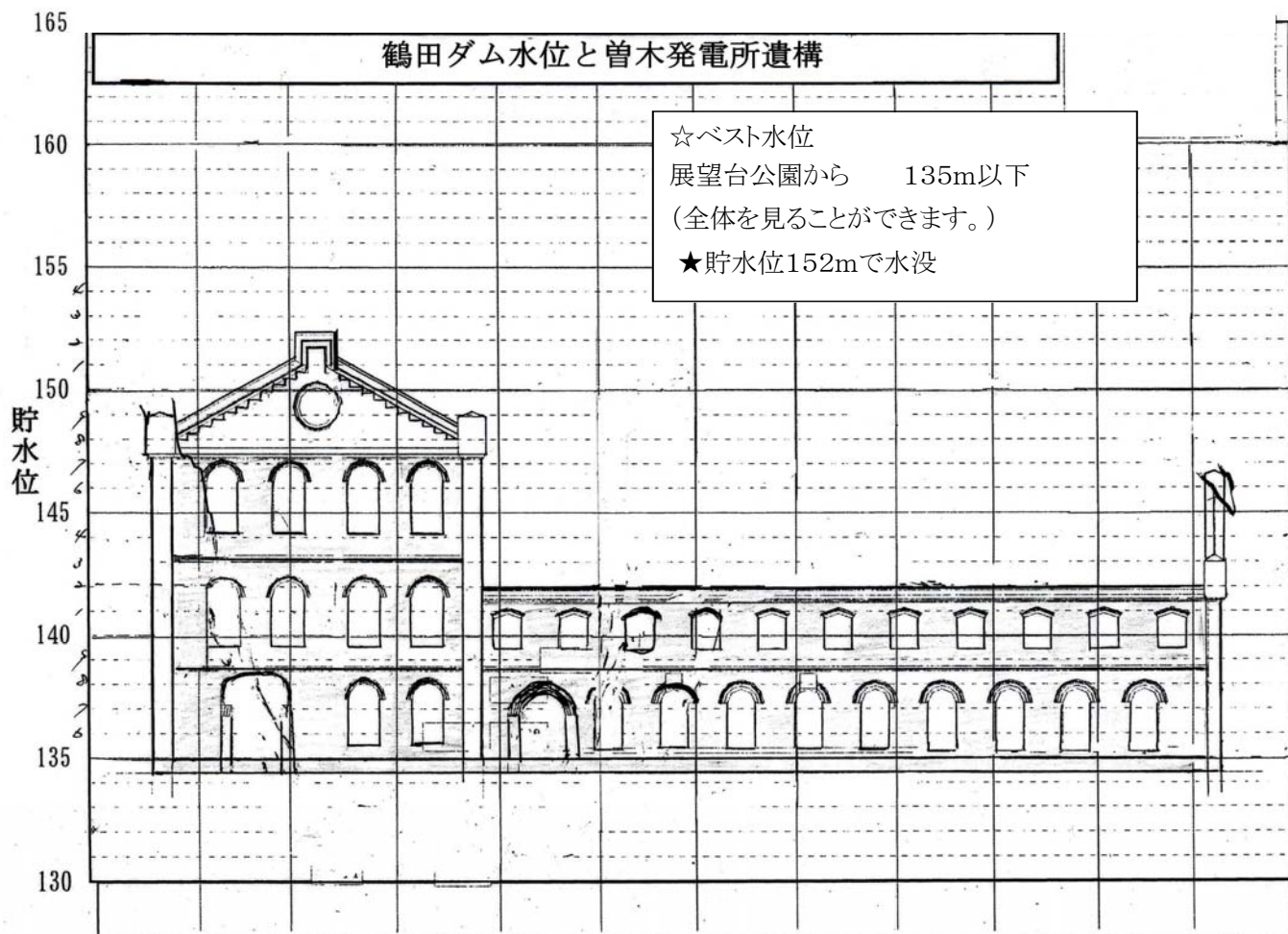
今、どこまで見える？曾木発電所遺構

曾木の滝下流右岸1.5Km付近に、「曾木発電所遺構」があります。

普段は、大鶴湖(鶴田ダム)の湖底に沈んでいますが、5月以降になると大雨に備えて、ダムの貯水量を減らし水害に備えるため、水位の下がった湖面から姿を現します。

以前、土砂と草木に覆われていた遺構は、堆積土の撤去時に見つかった3万個のレンガや鉄骨フレームによる補強工事などを経て、現在は建物とその後方の導水管の土台、ヘッドタンクを見ることができます。

是非水位を確認の上、遺構の対岸にある「曾木発電所遺構展望台公園」へ出かけましょう。



※ 鶴田ダムの貯水位は、「川内川防災情報」(下記WEB)で確認することができます。

水位情報

【携帯版】川内川防災情報『早よ見やん川内川』

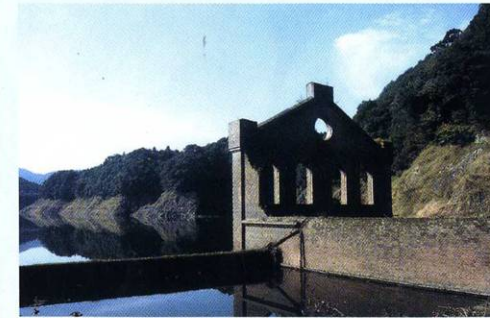
<http://www.qsr.mlit.go.jp/sendai/bousai/keitai/index.htm>

【PC版】川内川防災情報『早よ見やん川内川』

<http://www.qsr.mlit.go.jp/sendai/bousai/index.html>



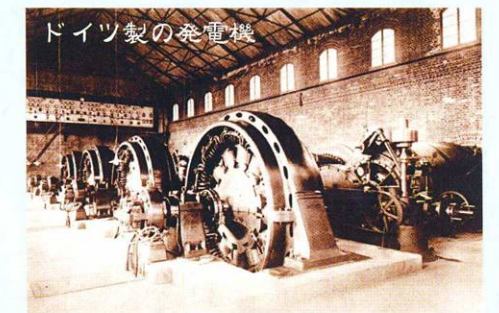
近代化学工業 曾木発電所遺構 発祥の地



操業中の曾木第2発電所遠景



毎年5月から9月まで姿を現す曾木第2発電所遺構



曾木第1発電所は明治40年に完成。翌々年の明治42年には曾木第2発電所(写真)が完成したので第1発電所は閉鎖された。同発電所の創設者は、『野口 遵』である。野口氏は曾木の滝の落差に目を付け、水力を利用する電気事業を計画、曾木電気株式会社を創設した。その電力は牛尾金山の動力源や近郊町村の電灯需要だけではさばききれず、余剰電力の消化を図るために熊本県葦北郡水俣村(現：水俣市)にカーバイト工場を建設した。その後、石灰窒素肥料の生産に着手し、日本窒素肥料株式会社を設立。戦前における日本最大の化学工業への道を踏み出し、日窒コンツェルンを築き上げた、これらは現在でもチッソを始め、旭化成、積水化学など日本を代表する化学関連企業へと発展している。

曾木第2発電所は、曾木の滝下流約1.5kmに位置し、発電量は約6,700キロワットと当時国内最大級の発電量を誇った。レンガ造りの洋風建築様式もさることながら、ドイツのシーメンス社製の発電機の導入や5つのトンネルや水路橋を持つ約1.5kmの導水路建設などが示すように、一大事業であったため、全国から技術者や作業員が集まり、この地域(下ノ木場地区)は活況に包まれたという。現在でも発電所やヘッドタンクの一部、水路やトンネルの大部分が残り、スケールの大きさを物語っている。

昭和40年、鶴田ダムの建設に伴い、約60年にも及ぶ曾木発電所の歴史も幕を閉じ湖底に沈むこととなったが、水力を利用した発電はクリーンな自然エネルギーであり、また、近代化学工業の発祥のきっかけとなった曾木発電所は、湖底から現代に静かにメッセージを送り続けている。

(産業遺産活用事業実行委員会)